前田河廣一郎 德永直
藤森成吉 村山知義

集

現代日本文學全集

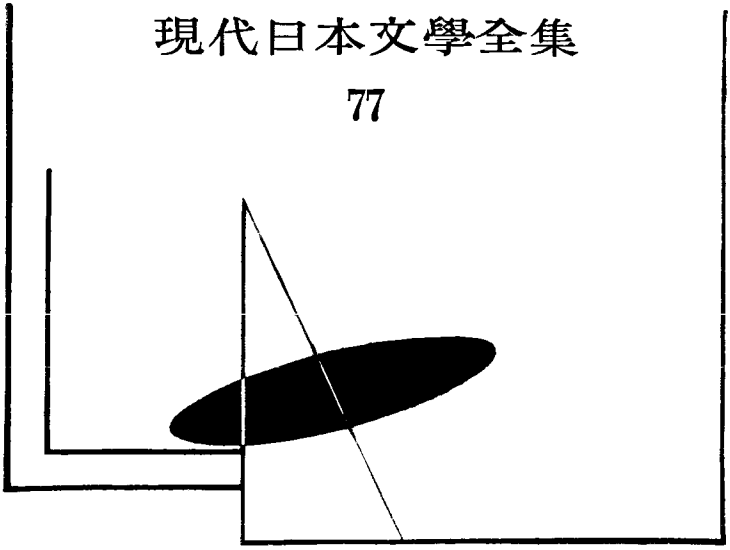
77

前田河廣一郎
藤森成吉
德永直
村山知義

集

現代日本文學全集

77



現代日本文學全集 77

前田河廣一郎
藤森成吉
德永直
村山知義集

昭和三十二年七月一日 印刷
昭和三十二年七月五日 發行

著者
前田河廣一郎
藤森成吉
德永直
村山知義

東京都千代田區神田小川町二ノ八
發行者 古田晁

東京都青梅市根ケ布三八五
印刷者 山田一雄

東京都千代田區神田小川町二ノ八
發行所 筑摩書房
〔電話〕東京二九局(29)七六五一(代表)
振替 東京一六五七六八

製本 牧製本株式會社
印刷 株式會社精興社
整版 株式會社精興社

前田河廣一郎集　目次

三等船客……五
赤い馬車……一三五
セムガ（鮭）……三九

藤森成吉集　目次

若き日の惱み……六七
山……一五一
拍手しない男……一六一
磔茂左衞門……一六三

德永　直集　目次

太陽のない街……一八九
最初の記憶……二七五
あぶら照り……二八三

村山知義集　目次

志村夏江……二九九
白夜……三三六
死んだ海（第一部）……三五九
前田河廣一郎論（青野季吉）……三九九
藤森成吉の人と作品（木村　毅）……四〇三
ただ一人の勞働者作家德永直（橋本英吉）……四〇七
村山知義瞥見（本多秋五）……四一一
解説……四一四
年譜……四一九

裝幀　恩地孝四郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

前田河廣一郎集

でよくわかつた。おんといつても、裸でおい方はよいさ、。それに、[illegible]
左エボ[illegible]にかを[illegible]ていきいらである。

2

それから、妻のボ作も裸におつてしまつたのであるが、死んだからといつて、母子の上に住宅難がおくおつたわけではおかつた。

地のが、まるで地球の表面から土地がおくおるのを[illegible]てでもいるかのように、夜にはつた二人を、おいそれと埋める場所がおいと

三等船客

一

「あれ、擽ったい。」

はねのけるやうに癇高な、鼻のひくい、中年期の女のみが發し得る聲が、總體にゆらゆらと傾いた船室の一隅からひびいた。女の姿は何かの蔭になつて見えなかつたが、男は前のめりに動いた姿だけ、汚らしい壁の上に、不自然な暴動の影を投げて、崩れるやうに暗い方へ消えてしまつた。

「畜生、ふざけてやアがる。」

かなりな距離ではあつたが、さつきからその暗隅を見すかしてゐた偏目の男は、卷煙草の端を上のベッドから床へ投ると同時に、もうぢつとして見ては居られぬと云ふ風な性急な言葉を吐いた。

そのわきに、ベッドに匍匐になつて講談本を讀んでゐた男も、その時、むつくり頭をあげて、偏目の男の熟視してゐる方を眺めたが、すぐつまらなささうに横を向いて、髯の中で嗤つた。

「ハワイへ着いたら尻尾を出すよ。」

偏目の男は、向き直つて對手に何か云ひかけようとした刹那、

「わたし、もう立つの。つまらない。ちよつとそこを通してさ。」

と早口に云つて、暗隅に居た女が、煤けた送風機の後ろから上氣した顏をあらはしたので、急いでまた元へ向き返つた。

「そんなに急いで立たいでもええぢやないか、かみさん――。」

肺の强さうな、男の聲が、蔭の方から女を追ひかけた。

「もう、男の人は、いや。」

脚元があぶないので、送風機の胴へ片手を置きながら、華奢な踵の高い白靴を、船室のまん中の一段高くなつた壇の上へ載せた女は、肥つた笑ひ顏を、今出て來た方へ向けた。その拍子に、船が一搖れしたので女の手は送風機の胴を離れて、壇上の足が床の上の足と重り合うたと思ふと、彼女の兩手はすぐ横手のベッドの鐵柱をめがけて、身體もろともぴつたりと吸ひついた。

「おゝ危い。――書生さん、御勉强ですか？書生さん。」

抱いた鐵柱をそのまま搖つた彼女は、のびあがるやうにして上のベッドを見あげたが、そこにゐる青年は頭から毛布を被つて眠つてゐた。

方々の男どもは、彼女の扁平つたい顏と派手な格子縞のスカートとに向つて犯すやうなみだらな視線を注いだ。女はきまり惡げに、いろいろな色合の毛布や蒲團で圍まれたベッドとベッドとの間に、まぎれ込んでしまつた。

「ふられたね。」

うすつぺらな笑ひとともに、妙に細い聲が、暗隅の男へ話しかけたらしく、その邊のベッドから響いた。二三人のえへら笑ひがそれに續いた。

「ありや一體何だい、君？」

「酌婦よ。」

「さうかな、それにしても堅氣らしい處もあるぜ。」

「君はまだ若いよ。」

正面の上のベッドに、あぐらをかいて、林檎をむきながら話し出した二人の青年の會話も、其時、舷窓の外を、まつ蒼な大幅の波が、强い肩でぐいと船體を押しのめして、甲板の上に大男が仆れた時のやうな物音を立てたので、揉消されてしまつた。亂雜な室内のすべての物は、一瞬間、ふらふらツと宙に浮いて、一息ついたかと思ふと、又逆にもとの位置へ急にぐらぐらツと押し戻された。けたたましい嬰兒や子供の泣き聲と、それらの母親らしい女の聲とが、一時に方々に湧きあがつた。枕元の金盥をさぐる音と生欠伸を嚙む聲もそれにまじつた。

『……後ろは禿山、前は海、
尾のない狐がゐるさうな、
僕も三度四度騙さアれイた、
なつちよらん……』

誰やらが、ほそい撓つた鼻聲で突然唄ひ出した流行遲れの歌は、すべての騷音に穢された病

的な空氣をかい潜つて、歌の續く間は人々の耳に、船室の勞苦を忘れさせる爲の妙藥のやうにひびいた。

「――あすこの隅の奴等は、みんなあれに惚れてるんださうだ。面白いね。」

偏目の男は、まだ執拗く暗隅の方を見ながら、講談本の男の肩を搖つた。話しかけられた方は、二三行讀み通してから、やつと「……兩人はこれより播州姫路をさして急ぎました。」とある處へ中指を挿し入れたまま本を閉ぢて、充血した眼をあげた。

「さうかね？――」暫く考へるやうな眼付をしてゐたが、思ひ出したやうに彼は駱駝の畫いてある安煙草を片手でつまんで、「――皆な渴ゑてる連中ばつかりなんだからね。」とシガレットを口へ運びかけて、「この三等室に乘つてる女と云ふ女で、亭主のないのア彼女つきりだらう。皆なが張りこむのも無理はなからうぢやないか。お化粧さへすりや、あんなお多福だつて滿更捨てたもんでもないからな。――」とシガレットを口にくはへて、枕元の米國製のマッチを鐵柱に擦つた。

「あ、こりや大變。あすこの奴等ばつかりと思つたら、君も、もうまゐつてゐるんだね。」偏目の男は顏の半分だけで、苦しさうに笑つて、いきなり對手の肩を打つた。

「何をぬかす、君こそ、見い、シスコを出帆してから、彼女の臀ばつかり狙つてるんぢやねいか。」

「僕が？……」と云ひかけて偏目の男はさつと顏を赧らめながら、「そ、そんな馬鹿なことがあるけえ。」と絡みつくやうな聲で笑つて、彼は揉みくちやになつた蒲團を敷いたベッドの上へ、くるりと仰向けに寢轉んで、一つの目をつぶつた。

人々の會話の複音は、一種の單調さを以ていつまでも續いた。時々それが、階上の便所の扉が船の震動とともにやけに柱に打ち當る音や、どこかでフライ鍋が吊されたまま壁を傳つて動く拍子にからからと鳴る響や、船腹を撲つて甲板にざわざわと裾を曳く波の音などに寸斷されて、一しほ眠さうに響くのであつた。多くの人人から發散する甘酸つぱく、饐えたやうな動物性の臭ひが閉された送風機の槍口の爲に、どこへも逃場がなくなつて、辛うじてシイ・デッキの便所の戸口へ通うてゐるので、そこへ溜つた尿素と石炭酸の臭を飽和したまま、再び船室へ舞ひ下りて來て、八十幾つかのベッドにある夜具の古綿や、めいめいの處に積み重ねた手荷物や、果物の籠や、蒼ざめた顏をして寢てゐる女共の肺の底までも沁み込んでしまふやうに思はれた。その空氣に浸りつくした船客のうちには、巨きい拇指のびくびく動く足の裏だけを見せてゐる男や、未熟な果物のやうな乳呑兒にだらけた胸元をひろげて寢てゐる婦や、青白い腹を露してゐる女の子や、電燈の光の屆かぬ邊に蒲團やら子供やらわけのわからぬ黑い團塊になつて突伏してゐる者などが、一樣に臭い息を吐いてゐた。折々臨月にまぢかい婦が、肩で息をしながら、ベッドの鐵柱傳ひによぼよぼと二階の便所へ通ふ姿などが、多數の視線につきまとはれて室內から消えて行つた。

廣い物置のやうな一室に、わづか五つしかない煤つぼけた舷窓の彼方に、黃昏の海は、寒さに刺戟された蒼白い波を戰かしながら、絕えず後ろへ後ろへと流れて行つた。時には、ガラス一枚の外で、まるで瀧のやうに暗碧の水の縞がどろどろと壁をふるはせて打ち當つたり、それが遠退くと氷山のやうな水の層が、また近づいて來る大波と、溫和しく抱き合つて、船から離れながら深い谷を作つて渦を卷いて行つたりするのが、恐ろしい他界の不思議な暴力の如く人人の眼を脅かすのであつた。

「腹がへつたな、――まだ飯にならんかなア。」皺枯れた聲が、どこからか、さう呟いた。すると、そのすぐ傍から、

「飯つたつて、例のバケツ臭い乾物の煮しめと、鹽つ辛い澤庵漬ぢや食ふ氣にならんからね。」と誰やらが、不平らしく繼ぎ足した。その時、色の蒼黑い船室附のボーイが、だらしない雪駄ばきのまま戸口へあらはれて、莫迦丁寧な聲で叫んだ。

「さア、さア、皆さん、これから、船室の檢査がありますから、どうぞ床の上へ物を落つことさんやうにして下さい。煙草の殼や、蜜柑の皮などね。濟み次第すぐ御飯に致しますよ――。」と妙に船客を鼻であしらふやうな事を言つてゐ

なくなると、人々の間には、一しきりベッドの上へ立ちあがつたり、金盥をかたづけたりする氣勢がして、片頰へべつとり寢亂髪のねばりついた女がきよろきよろ首だけ擡げてその邊を見廻したり、子供が眠から醒された時に限つて立てる泣き聲などが聞え出した。一日中、必らず誰かがどこかの隅で燃やしてゐる會話の火は、再び船室一杯にひろがつた。元氣の良い掛聲で、上のベッドから飛び降りる若い者などもあつた。

「どうです、かみさん、一寢入りしやしたか？」赭ら顏のがつしりした男が、暗隅からあらはれて、『十三番』と札を貼つた酌婦のベッドへ、づかづかと寄つて來た。飛びあがるやうにして毛布の中から半身を起した女は、まだ眠げな眼をぼんやり瞠いて忘れたことを思ひ出したやうに、

「もう、御飯ですか？」と訊ねた。

「御飯――？　さうよ、御飯はとうに濟んだがね。あんたがあんまり寢坊しとるんで、もう明日の朝までは御飯にはありつけアせんぜ。」

男はとぼけ顏をして、女のベッドの片端へ無遠慮に腰をおろした。女は絹の靴下のちらと見えたスカートの邊をかばひながら、無意味な笑ひに、健康さうな齒を見せて、ベッドから降り立つた。

「嘘。」

「いいや、ほんたうさ。今御飯をつめた俺の腹アこの通りつつ張つてるがな、觸つて見なされ。――」

「どれ、どれ。――」

「あいたツ。」

その時、三人の男がそのベッドの前へどやどやと押寄せて來た。

「もう來てるか、早いなう。」

紀州訛の、角顏な、色のなま白い男に續いて、顏の黑い、聲の細い青年が、剽輕な聲でわめき立てた。

「妬けるね、いつもかう二人でちんかもをきめてるのを見ると。」

「さうよ、いくら船ん中だつてな。」

茶色のスウェタアを暖かさうに着た偏目の男が一番後になつた。五人は狹いベッドに目白押しに掛けて、囂々わめき散らしてゐたが、突然、いままで靜かであつた上のベッドから、色の淺黑い二十五六の青年が、安全剃刀を片手に、半身をあらはして、心持侮蔑を含んだ眼元で一同を見競べてから、女へ向つて、

「君、あの鏡をちよつと貸してくれませんか？」と優しく尋ねた。

女の瞳は、素早く青年の視線を掬ひ上げて、一瞬間、二人の視線は絡みついたやうに、空中にぢつと交錯したまま挑み合つてゐたが、女は急に媚のある癇高な聲をあげて、

「顏を剃るんですか？」とわざとらしく眼を瞠りながら尋ねたが、やがて男どもを立たせてベッドの邊をそそくさ探し始めた。

「御安くないね、いよう、色男。」

「二階にお輕がのべ鏡かね。」

下の四人は、そんなことを小聲で言ひ合つた。

「あ、ありました。書生さん。」女は青年の顏を下から覗くやうにして、鏡を手渡しながらにツと笑つた。

「よう、よう。」

「俺も書生さんにあやかりたいな。」

人々の聲に遮られた青年の言葉は「……どうも髯が伸びて」と云ふ一句だけが、女の耳に入つた。女が自分のベッドの方へ戻るといきなり誰かの拳をぴしやりと平手で叩く響がした。上のベッドの青年は、ブラッシュで鼻の下や頤へ石鹼を塗り立てた。

この時、かつかつと梯子段を降りて來る五六人の靴音がして、妙に語尾を落した會話のきれぎれが、急にひつそりとなつた一室の内へ響いて來た。船客の多くはベッドから伸びあがつて、檢査に來た船の役員どもの姿を訝しさうに見遣つてゐた。役員は總勢五人で、室のボーイが一番後から、ふだんよりも威張つた表情をして、白のジャケットを着込んでついて來た。眞鍮釦をひからした彼等は何かの缺點を船客の間から探し出さうとする鋭い眼で隅々を見廻しながら、さもさも重要事らしく何事かを囁き合つて靴音嚴かに次室へ通過して行つた。まつ先に立つた制服制帽の、口髭を短く刈り込んだ、日本人の船長の貌だけは、暫く人々の記憶に殘つた。

「船長も糞もあつたもんけい。一體俺達を何と思つてやがるんだ。かう見えても、へん、御客樣だぜ。船賃こそ安いかは知らねえが、ちつた

ア人間並の待遇をしろい。船會社ア俺達がかうやつて大勢乘り込むからこそ儲かるんだ。こんな臭いとこへぶち込みアがつてさ、あの飯は何だ、一體、莫迦にするのもいい加減にしねえか。……」

眼の圓い、赤肥りに肥つた老爺が、酒臭い息を吐いて、一番先に煽動家らしい口吻で船室の沈默を破つた。彼は叫びながら、ベッドからまん中の食事用の卓へせり出て來て、そこへ括り猿のやうな拳をとんと置いた。

「さうよ、さうよ、まるで豚小屋ぢやねえか、このざまはよ。」百姓らしい老人が、胡麻鹽頭をふりながら、講談本を讀んでゐる男の下のベッドから合槌を打つた。それからそれへと、相應ずる者の聲で、夜になつた一室には、桑港を出てからここ三日間の待遇の悪い會社の仕打を非難する不平で充ちてゐた。

『十三番』の女を中心として集まつた男どもは、何やらはしやいだ聲で、高らかに唄ひながら、折々、どつと笑ひ崩れてゐた。

「飯だ。」

正面のベッドにゐた二人の青年が、さう叫んで、ベッドを立ちあがつた。送風機の向うから、ボーイが茶碗と箸を入れた笊と、香の物を盛つた鐵葉の皿を抱へながら、動搖する床をふみしめ、ふみしめ、こつちへ運んで來るのが見えた。次室の天井から、湯氣の立つ飯櫃を、汚らしい繩で釣り卸すのが、立ち犇く船客の間から、手にとるやうに見えた。複雜な騷がしさが急に室の四隅から湧いてまん中へ集まつた。

「飯だ、飯だ。――」

「御飯ですよ。」

「そら、飯、飯、飯ツ。」

口から口へと、この簡單な言葉が、見る見る傳染して行つた。口に出さぬ者も、群集の勢ひに動かされて、腹の中ではかすかに「御飯」と囁かざるを得なかつた。箸箱を持つてベッドから飛び降りる者や、子供の名を呼ぶ聲や、茶碗の壞れる音や、バケツを蹴つた靴音や、人々の重みにきしるベンチの響や――大勢の人が、無造作な會食をする際に起すすべての物音は、船室の萎えた空氣を一變して、急に賑かな、騷々しい景氣付けをした。

「ボーイさん、お菜が來ないぞ！」

「お菜だ、お菜だい、間抜奴。」

「何をしてるんだい。先刻註文しといた蒲燒と口取を忘れるなんい。」

人々は笑ひどよめきながら、首を伸ばして次室の天井から、まつ黑い繩で吊り下げられる笊を見てゐた。一人の男が、箸で茶碗の緣を、かんかん叩いて、床板をとんとんと拍子を取つて蹴ると、もう一人の男が、別な場所でにやりと笑ひながら、同じことを繰り返した。すると、それをきつかけに、模倣者がそこにもここにも增えて、しまひには、卓へ顏を出した男どもは、皆一齊にその卽興の馬鹿囃を始めた。男どもの間に挾まれた婦達は、狂氣染みた動亂の底に、食慾のなささうな顏に微笑を嚙みながら、うつむいてゐた。

「さア、さア、皆さん、お待兼のお菜が參りましたよ。――鉢卷をしてお食んなさい。頰つぺたが落つこちるほど甘い物ですよ。食料はついてゐるんですから、御遠慮なしにたんとお食んなさい。――どうぞお靜かに願ひます。」

煮物の小皿を山のやうに積んだ笊を、汗みどろになつて運んで來たボーイは、唇を歪めて叫びながら、一同を笑はせた。暫くすると、船室はにはかにひつそりして、湯を啜る音と、舌打する響と、飯櫃を少しこつちへよこして呉れるやうにと囁く聲などが聞えるだけであつた。人人は、時々、茶碗から眼をあげて、自分の周圍を見廻して、これ程大勢の人間がこの船室には居つたかしらと疑ふやうに、卓へ押し掛けた多數の人々を眺めた。席がないので、立ちながら頰張つてゐる者もあつた。食物だけは二等まがひの特別な膳を運んで貰つてゐる者は、尊大らしくベッドの上から下の食卓を瞰下して、ボーイの持つて來るオムレツなどを撮んでゐた。箸をつけたと思ふと、すぐ吐瀉してしまふ婦なども見受けられた。

二

晩餐のすんだ後には、牛肉の片や、箸の折れや、澤庵の端などが、處嫌はず撒き散らされた飯粒と、煙草の吸殼とに雜つて、恰度、何物かが突然そこへ亂入して、手當り次第にすべての物を破壞して行つた跡のやうに思はれた。それ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

をボーイがせつせと掃除してゐるのを見戍りながら、人々は蛆のやうに轉げて行く飯粒や、齒形の立つた大根の端などに、つくづく食物と云ふものの氣拙さをさとつたやうな眼付で、めいめいのベッドに飽食の體を横へた。

湯氣のやうにむんとする溫かみと、すべての物が核心から腐つて行くやうな臭みとに閉された船室には、だんだん時が經つにつれて、人々の談もやや下火になり、時間の拘束の無い場所にあり勝ちな、底深いけだるさと、何かしら强烈な刺戟を覓める本能が、陸の生活のすべての約束から解放された人々の頭に根强く湧いて來た。一樣に懶い表情をして煙草を吸うたり、とろんとした眼を開けたり閉ぢたりしてゐる彼等の或者は、折々、何か事件が起ればいいと云ふ風に、ひよつくり、ベッドから首を擡げて、部室の中を見廻すのであつた。船の賄の粗惡な談や、アメリカ人と喧嘩した談などが、かう云つたふやけた空氣のうちに、ちよろちよろと流れ出ては又すぐ沈默に吸ひ込まれた。それでも、女の談だけは執念深くそこここに繰り返された。

一隅の上のベッドに、仰向けに寢そべつてトラムプを弄つてゐた青年が、向ひ側のベッドに鼻唄を歌つてゐる紀州訛の男へ話しかけた。

「やろか。」

話しかけられた方は、しまりの無い唇を開いたなり、流眄に青年の釣りあがつた眉を見遣つて、

「何をするんか。」とじめじめした口吻で訊き返した。

「トワンティ・ワンは？」

「よからう。」彼は首肯いて、青年の隣のベッドに、膝を組みたててその上へ本を載せて讀んでゐた學生に「あんたはどう？」と起きあがりさま、促した。學生は氣輕に受けて、膝の上の本を枕の下へしまひ込んだ。三人では面白くないと云ふので、『十三番』の女と、赭ら顏の男とが加へられた。五人は青年と學生とのベッドに、珈琲色の毛布を敷いて、圓座を畫いた。

「親は誰？」

「くじがいい。」

「じやんけんで定めようよ。」

親になつたのはトラムプを持つた青年であつた。マッチの棒が一人前二十五本づつ、一本二十仙で各自が親から買ふことと決まつた。無聊と倦怠から急に一つの遊戯に集中された五人の人々は、活々とした笑顏を浮べ、心の中には一種の家庭的な親しみを共有してゐるやうに感じたのであつた。器用に切られて、器用に各自の膝下へ撒かれる札の一枚づつ增えて行くのを樂しみに待つてゐるかのやうに、四人は妙に張りつめた忍耐力を以て、親の細長い指を油斷なく見戍つた。五人の頭の影は、カードを拾ふために動く時だけ、ひらりひらりと毛布やベッドや壁の上に躍動したが、ややともすると、ぢつと珈琲色の毛布の上に永い間しがみついて何か深い考へ事をでもしてゐるかのやうに見えた。彼等の弛みない視線と指尖だけが、注意深く働いた。

「もう一枚。」赭ら顏の男は手元に配られた伏せ札とハートの女皇を見くらべてゐたが、太い聲で呟いた。

「いいの？」親の手からはダイヤの三がひらりと辷り出た。

「よし。」貰つた方は首を縮めて、それを伏せ札と數へ合はしてから、强く口を噤んだ。

「そちらは？」

「もらはうか。」

「ほら來た。」

「もう一枚。」紀州訛の男は、手札を二枚開いて、片手で煽るやうな手付をしながら、伏せ札を呼んだ。

「そーら、ブローク。」親は慣れた手付で、マッチを浚つて行つた。

一回目の勝負は、親の全勝に歸した。マッチの大部分は彼の膝下へ無造作に投り込まれた。かうした勝負が、しばらくの間續いた。マッチはそつちへ集つたり、こつちへ搔きよせられたり、一人の膝の前に手薄になつたと思ふと、すぐ又そこへ倍になつて戻つたりした。立ち罩めた煙草の煙を通して、

「張りますよ。」

「そら、ブラック・ジャックだ。」

「ああ、これで一弗損しちまつたな。」

などと云ふ言葉が、次第に靜まりかへつて行く船室の片隅から漏れた。いつの間にか風になつた海の上を、辷るやうに進んでゐた船は、折

折心臓のやうな機關の鼓動を、遠くの方で間歇的に聞かしてゐる外、時々、海のどこかで、綿の棒で大地を撲つたやうな波の音が、眞夜中の底知れぬ大洋の寢返りを打つてゐる態を想像させるのみであつた。そこここのベッドには鼾の聲がだんだん高まつて行つた。

紀州訛の男は、ポケットからウイスキイの罎を出して、

「どうです？」と學生の鼻先へ突付けた。

「いや、いけません。」

「ぢや、あんたは？」突出した手首を動かさずに、罎の口だけ女の方へ向けた。

「ウイスケ？　すこしくださいな。」女は眉根に小皺を刻みながら、罎を受取ると「このまま飲むの？」と罎の貼札と男の顏を見くらべた。

「喇叭飲よ。」彼は素氣なく答へて、札を切り始めた。罎は女から赭ら顏の男と眉の釣りあがつた青年へ廻つたが、他に飲む人がなかつた。自分の處へ歸つた罎を掴むと紀州訛の男はまだ九分通り入つてゐる酒を、本能的に眼の前に翳して見て、ぐいとそのまま口へ持つて行つて、咽喉を鳴らしながら半分ほど飲んでしまつた。飲み終ると「ほーう」と太い息をして、再び罎をポケットへ納めた。カードを撒き終つてから、彼は膝下のマッチを擦つてシガレットに火をつけながら、酒に嗄れた聲で、

「さア、少し仰山張ろか。――」と云つて、マッチをぽんと外へ投つた。

立ち後れた形で、三人は勝負にならず、伏せ札とジャッキとスペードの三をぢつと手元に見戍つてゐた學生と、彼との勝負になつた。

「見ようか。」學生はマッチのありたけを場へ拂ひ出した。その時、隣り合ひに坐つてゐた『十三番』の女の柔かい膝が、骨張つた學生の膝を二三度ぐいぐいと小突いた。目をあげると、女はほんのり上氣した眼を意味ありげに細めて、彼に眴をした。

親は自分の札を用心深く引いて、一枚だけ手元に伏せて待つてゐた。

「いかう、――鐵火でいかうかい。」頓て彼は膝の下のマッチを太い手でぐいとまん中へ押し遣つて、學生の顏をぢつと覗き込んだ。マッチの大部分は場へ集つた。手合せになると、學生は自信のある手付で、伏せ札を輕く撮んでひよいと場へ開いた。五人の視線は一時にその一枚の札へ集つた。と思ふと、急に轉じて親の手元へ撥ね歸つた。そして、突然湧いた一種の感情を陰蔽した時誰もが使ふ急激な表情、――沈默を守つて、恐ろしさうにまん中のマッチの數を目で計つた。すこし經つと、傍の三人は、殆ど同時に叫び出した。

「紀州さん、どうしたの？」

紀州訛の男は醉の廻つた顏をあげて、唇を歪めながら、ていかくしに高く嗤つた。

「ブラフだと思つたら、トワンティ・ワンか。――敗けた。敗けた。」

彼の鼻にかかつた聲は、船室いつぱいに底力のない、からな響を送つた。どこかで、小兒の魘される聲がそれに雜つた。

「わたし、醉つちまつたの。もうよさうぢやありませんか。大分遲いわよ。」女は紅くなつた頬を、圓い手で撫でおろして、人一人動いてゐない船室を、不思議さうに見廻した。マッチを數へてゐる學生に向つて、紀州訛の男は、熟柿臭い息を吐きかけながら、「勝つたなう、あんたは。」と取つて付けたやうな御世辭を浴びせた。ひつそりした室内に皆の勘定してゐる金貨や銀貨の音が、氣味惡くひびいた。

彼是三十弗ほど損をした紀州訛の男は、金を拂ひ終ると、退屈さうに脊伸びをして、膝を組みなほした。學生に金を數へてやつてゐた女がふと眼をあげると、彼の細い鋭い眼が刺すやうに自分の上に注がれてゐるのを知つたので、彼女は何氣なく、肥つた頬で笑つて見せた。

「あんた、大へん醉つたやうだが、一寸甲板へでもあがりませう。私もこんなに醉つちまつて、どうもならん。そんなに遲いことはないがの、まだ十一時ぢやけに。」彼は金側の大きい時計を女の方へ向けた。女は顏へ表はした笑ひをどう始末していいか迷つたやうに、不自然な微笑を續けたが、不意に膝を立てながら、冗談らしく答へた。

「連れてつて頂戴な。」

「あれだ。」赭ら顏の男はベッドの梯子をおりかけて、情けなさうな眼で彼女を見あげた。

「甲板へ出りや、あんたと二人切りぢやけに、よ、――」紀州訛の男は女の手を執りながら笑

ひ崩れた。話の繼穂が無ささうに默つて俯首いてゐた學生は、
「僕もいつしよに行きませうか。」と顏を染めながら言つて、きまり惡げに二人の樣子を下眼で見くらべた。
「學生さんも？……かまはないことよ。いいでせう？」女は男の手を振り挽いで、紀州訛の男に訊ねた。
「……三人でかい？」彼はごくりと咽喉を鳴らして、一瞬間の躊躇を示したが、すぐ狡猾さうな眼を天井へ投げて、
「……變な御連れさんぢやて。」と空嘯いた。
「浪にさらはれると危險だよ。」學生はつけつけと咽喉から鋭い言葉を吐いたが、言ひ終つてから自分で自分の拙さ加減に苛立つた風に唇を嚙みながら、枕の下の本を取り上げた。
女は黑と白の毛織の襟卷をすつぽり頭から被つて、あぶなげな足取で、男の導くままに梯子段をあがつて行つた。
「書生さん、妬いたなう。」男は上甲板へ出る艙口の梯子をのぼりつめて、アメリカ流に女の腕を執つて戸口を跨がせながら、鼻先でせせら笑つた。暗と電燈との境に、彼の金齒がちらりと氣味惡くひかつた。女は不安な表情を見せまいとするやうに、默つてただにツと笑つて見せた。
月の無い晩であつた。のろりと重い海の上を、汽船は幽かに浪を截る音を立てながら、辷るやうに暗の中へ、暗の中へと深く進んでゐるのであつた。風呂桶を長くしたやうな煙突から右舷へかけて、斑な星の帶が、深い黝い空を斜に切つて、長く幅廣くひろがつてゐた。仄白い旗を結びつけたマストは、そのすぐ傍の妙に底びかりのする一つの星を、掠めて二三寸外れたかと思ふと、又そこへ戻つて來ながら、わづかに巨船が何物か船よりも强い力に押し動かされながら進んでゐるのを暗示してゐた。蒼茫とした船の外の世界から、青白いものが、大きい皺のやうに、折々靄をわけて、縒れ縒れになつて近づいて、甲板の光圈に入ると黑と青の二幅の波に割れて、船腹を擽るやうにさわさわと逃げて行つた。女の後れ毛が片頰へ戯れつくほどの軟風が、どこからともなく吹いてゐた。
「――ハワイへつくのは、もう二日目？」女は、ずんずん先に立つて急ぐ男を引留めるやうに、意味のない問を發した。
「三日目だよ、――」男は熱い息を吐きながら、言葉をちぎつて答へた。彼の細い眼は女の全身を取入れてしまふやうに、ぢいと彼女の朧な姿を凝視めた。突然男の腕が彼女の背に廻つた。
「あんた、さみしいか？」
「そんなことないわ。みんな親切な人ばつかりですもの、どこへ行つても。」
「いままでどこにゐたの？」
「シスコよ。それから田舍の方へも行つたわ、パパさんと。」
「パパさん幾歳？」
「わたしと十六ちがふのよ。姉さんを貰ふはずだつたけど、姉さんが他の男と出來ちまつたのでわたし身代りに來たの。わざわざ寫眞と御金を送つて來たんですから、――」女は、一等室の圓窓から漏れる光の前を横ぎる拍子に、まつ黑い海を背負つて、一瞬間くつきりと浮出た男の横顏を、流瞥にちらと見遣つて、聲を落した。男はがつがつと身内に悶を感じた時のやうに、暫く押默つてさつさと早足に歩いた。誰もゐない甲板には、二人の靴音が不規則に、暗を刻んでどこまでも續いた。舳の方へ近づくに從つて、機關の響と船の動きとがより强く感ぜられた。暗に慣れた二人の眼には、その邊の送風機の群やら、起重機の柱やら、艙口の扉やら、欄干やボートなどが、手を觸れたならそのまますうつと暗へ消へ失せさうに、青白く立ちならんでゐるのがわかつた。甲板の下の方から、まだ寢つかぬ人々の話聲が、厚いガラス窓を徹して響いて來た。二人は自分々々の事を勝手に考へて歩いた。女は幾度か無言で抱きよせる男の執念深い腕をすり拔けたのである。
「わたしあんたのパパさんになるがなア。――」冷たい欄干へ手を置いた女に、男は背後から優しげな聲で囁いた。
「今夜、あなた大變敗けたのねえ。――」女はつかぬことを言つて、壓迫して來る男の力を外らさうと試みた。男は默つて、鼻から呼吸をした。暫く經つと彼は、
「金なんかどうでもいいや。――」と投げ出したやうに言つて、海へ向つてぺつと唾を吐いた。上のエイ・デッキで誰かの靴音が遠くの方から

聞えて來て、又ぱつたり止んでしまつた。機關の音が船の胴體の底に、重々しく何かに焦躁を感じたやうに、急に二人の耳へ入つて來た。男は抵抗の無い女の肩を雙手で搔きよせて、
「いやなの？」と息を喘ませながら、女の唇をもとめた。痙攣的な微かな動作で女は男の方へ體をねぢ向けた。
「誰か見てゐるといけないわよ。」
暫くすると、女の尖つた鼻聲が、折重つた靴音の下に、か細く響いた。
「何、誰もゐやせんがな、そりや氣の所爲ぢやけに。」男はぼそぼそと囁いた。その途端に、女の襟卷が獸か何ぞのやうに、ひらりと暗に跳ねあがつて、音も無く甲板へ落ちた。すると、突然、空の方から、絹を裂くやうに、
「あツはは、あツはは……」
と笑ふ淋しい聲がした。
男と女は撥ね飛ばされたやうに、距離を置いて、暗から立ちあがると、女の方から先に小犬のやうな唸りを發して、男の腕へしがみついたのであつた。上の方をすかして見て、男は、
「あれ、狂人よ、あすこの房室にゐる婦だよ。」
と强さうに言つた。
「おゝ、びつくりした。さ、歸りませうよ、わたしこはいわ。」
「ま、もちつとゐようよ。あんなもの無關ぢや。」
蜿りの大きい波が、一搖り船を動かした後は、靄の深くなつて行く甲板には、大洋のどん底から湧き出すやうな、重苦しい沈默がすべての物音を小さく封じ籠めてしまつた。
と、突然、女のヒステリックな聲が沈默を破つた。
「いや、いや。この人は、默つてるといい氣になつて！」
ぴしやりと男の頰を撲る響がして、もつれ合つた二人の肩の間から、女の圓まつちい手が、五本の指をひろげたなりに男の胸をめがけて飛んだ。

三

前の日と同じやうに、その日も暮れるのであつた。
凡ての出來事が、前の日の出來事を眞似てゐるやうに單調で、古臭かつた。同じやうに舌觸りのわるい飯が、同じやうに鹽辛い副食物であしらはれた。甲板の散歩も、煙草の味も、安煙草の煙の層の下に漂うてゐる話題も、一定の仕事のない無聊さも、サン・フランシスコを出發した其日から、一日として變つたことがなかつた。人々の心も、同じ獄衣を着て、規則正しい監視の下に置かれたやうに、何一つ珍らしい事を考へ出すことが出來なかつた。それでも、この重苦しい、ふやけた空氣のうちに、だんだん熱帶地へ近づいて行く豫感としての暖かさだけは、少しづつ人々の生活を變へて行くと同時に、彼等の心に自分達の旅行に就いて何かの目的があつたことを思ひ起させるのであつた。そして、彼等の會話のうちには日毎に『ハワイ』と云ふ言葉が餘計に挿まれるやうになつた。だが、彼等の大多數は盲目的に自分の生活を、汽船その物に任せ切つて、サン・フランシスコから横濱までの旅程を出來るだけ何も考へずに、その日その日の生活を送つて行くやうな自暴的な懶惰に陷つてゐるのであつた。さう云つた人達は物を食べてゐない時は、鈍重な眠りに陷るか、無駄話をするか、その孰らかを選んだ。たまに甲板へ出たり、ものの本を讀んだりする者があつても、それは彼等の全生活とは何の關係もない、不意の出來心からする行爲に過ぎなかつた。
その晩も食事が濟むと、まだ雜巾のあとの乾かぬうちから、一塊りの男どもが、白けた、みだらな微笑をうかべながら、二三人の饒舌者を中心として集つた。
「――その半巾お玉つてい名はどうしてつけたんですか。」と一人が訊ねた。
「いや、面白いんだ。人三化七たアあの女のことだらう。處が、奴さん、顏は醜いが客の待遇が上手でね。それで、御客は顏だけ見ないやうに、半巾を掛けると云ふ寸法さ。――」
「メリケン人が日本人を排斥するのも無理はないと思ふこともあるね。寫眞結婚をやかましく云つてるが、あれで、ほんたうの處を曝け出した日にや、お互に肩身が狹いからなア……」
「白ん坊だつて、あんた、中へ入つて見りや腐敗しとるちふ話ぢやねえか。」
「まア、人間つてい奴は、五分々々だね、白人

だつて皆々善い奴ばかり揃つてるとは限らんよ。ジャップが悪いなんて云つても、大統領のウイルソンなんざあ淫蕩で仕方がない男なさうだからな。それから今、日本で代議士だの、學者だのつて威張つてゐる連中がもとを洗へば、女郎のピンプをやつて勉強したり、白人の寡婦を騙して學位を貰つたりした連中もかなりあるんだからね。」

「――ともかく、かうやつて皆なの話を聽いてゐるが、船ん中ぢや女の話に限るね。當り觸りがなくていいや。ほかの事になると、どうも話がごつくつて、角が立つもんだが、この話ばかりは、聽いてゐても誰も損をした例はないからなア……」

いつも酒臭い息を吐いてゐる、眼の圓らな老人が若い者を見廻して、むくれあがつた唇を舐めづりながら、「あツハ、あツハ」と無遠慮に哄笑した。彼の聲に和して、笑ひ興してゐた一群の若い者は、だらしない眼付で、ベッドの上に居る婦どもを見返つた。

束髪の形がくづれた油じみた頭を、重苦しさうに持てあましてゐた婦どもは、彼等の枕元で男達が、言葉で表はせぬほどの猥褻さを手振りや身まねで表はして、展覽會に工場が競うて製作品を出品するやうに、あること無いことの限りを捏造して語りあつてゐるのに、顏一つ赧らめもせず、くすくすと男にはわからぬやうな微笑を含んで、耳を濟ましてゐた。

そのうちに、何かの機會で、微かな變化が船室一般の空氣を支配するやうに見えた。一隅には、昨晩の連中が、またトランプを始めたらしく、そこへ吸收されて行つた人々の爲めに、まん中の食卓に集つた人影も、大分疎らになつた。話し疲れた者はベンチへ足を伸ばして、あたり憚らぬ大欠伸をした。煙草を吸つてゐる者は、一口でも早く一本のシガレットを吸ひつくしてしまひたさうに、やたらに黄ろい煙を鼻孔から吐いた。まだ話し續けてゐる者どもも、話をする當人が、言葉を選んだり、記憶を辿つたりする爲めに、咽喉の邊で「え――」と聲を引張るのが、堪らなく待ちもどかしさうに、いらいらした眼で御互の顏を見戍つた。彼等は各自に、だんだん深いけだるさの底に落込んで行く心を、無理にも刺戟の強い言葉や、實感を再現することで、惹き立てようとあせればあせるほど、言葉が上辷りになつて、ほんたうに言はうとすることと遠くなつて行くのを感じた。今まで無限の好奇心から眺め合つた違つた顏も、その人の職業も、もう珍らしさを失つて、普通の挨拶以上にその人間の氣質や經驗などを穿鑿して見ようと云ふ氣も起らなくなつてしまつた。

どのベッドにも、寂寥に苛まれた、壯健な肉體を持つた男や女が、息のつまるほど彼等の前途に塞がつてゐる『時』の重みを、どうして過さうと云ふ考へもなく、彼等の第二の本能である勞働から、一時釋放されたまま、何をするともなく、ただぼんやり煤けた天井や、上の人間の體のなりにふくらんだ帆布のベッドなどを眺めてゐるのであつた。

「諸君、ちよつと御相談に及びますが――」一人の肥つた男が、小さなしよぼしよぼした眼を、肉の塊のやうな顏に働かせながら、いつのまにか船室の入口から妙な聲を絞り立てて室内へ叫んだ。大食をする家畜のやうな男であつた。彼の背後には、偏目の男と講談本の男が、ポケットへ手を捻ぢ込んで、心持腹を突き出しながら、一室を見廻してゐた。

「あのう、ずつは今晩、當船に乘合せました日本浪界の權威、雲右衞門歿後の今日眞に彼の衣鉢を傳ふる第一人者と謂はれまする木村友燕君が、豫々米國で皆樣の御贔屓を蒙つた御恩報じに、一夕の御清聽を煩はしたいと、不肖を通ずて申込んで來られますので、それならと云ふので當室の有志と御相談の上、幸ひ機關室とは一番かけ隔つて居りましる當室を暫時御借り申して、一晩丈け御邪魔をさして戴くさうで御座いますが、如何でせうか、もし諸君に御異議がなくば、早速その準備に取りかからせることと致します。」云ひ終つて、彼は、胸の太い金鎖を弄りながら、じろじろ四方を見廻した。彼の奥州辯は、撓つたセンチメンタルな聲と對照して、ちよつと滑稽な感じを與へたのであつた。

その男の傍から、偏目の男も、尖りを帶びた聲を張り上げて、

「今晩は、只今御話の通り、木村君の最も得意な義士銘々傳の大立者たる中山安兵衞をせられるさうですから――」と附け加へて、自分で自

分の言葉に恥ぢたやうに、颯と顔を赧らめながら、一室の喝采や拍手に送られて、次の室へ出て行つた。

今までの單調が急に破られて、人々の心には新しい感激が湧いた。ボーイが三人どこからか紅白の幕を持つて來て、正面のベッドの鐵柱へ釣りあげる。食卓が取除かれた壇の上には、帆布が一面に敷きつめられ、辯士卓にはフラスコとコップが運ばれる。見る見る汚い船室は、浪花節の定席と變じてしまつた。しぼりあげた幕の前の、日本の國旗と汽船會社の旗とが、人々の眼には如何にも華々しく映じたのであつた。

舳の三等室から來た人々と、艫の船客とは、初めのうちは異人種のやうに、滅多に話もせずに別々に塊り合つてゐたが、時が經つにつれて、煙草の火を借りる者や、語り手の噂をする者や、前に坐つてゐる女の批評をやる者などが增えて、いつのまにか、同じ目的の下に集つた、單純な複數に化つてしまつた。

鈴が鳴る。奥州辯の男が、卓の前へ立つた。壇をはみ出た群集は、梯子段や、床の上、壁の際などから、熱心に拍手をした。

「不肖が在米邦字新聞記者を代表すまして、今晩の司會の任を帶びましたことは非常な光榮に感ずる次第で御座います。床次內相閣下が浪花節を以て忠君愛國の大精神を鼓吹する宣傳機關と御考へになられましたことは、實に深い意義があることと存じます。同じく思想方面の宣傳者たる私どもの、今夜の如き會を皆樣の前で企てしましたことも、決して御緣の無いこととは申されません。抑も、藝術と思想とは……」

その男は齒の浮くやうな事柄を、生硬な植民地式な熟語で長々としやべり立てた。幕の後ろには、語手らしい男が、黑の三つ紋の羽織を着流して、聽衆の中の婦の顏をじろじろ覗いてゐた。稍だれ氣味になつて、新聞記者の演說が終ると、音〆を合せる三味線の音が、拍手や呼び聲の響に雜つて、人々の心を浮き立たせた。世話役の偏目の男は、幕の後ろから、ひかつた一つの眼を働かせながら、黑い團塊になつて蠢動してゐる頭の數を概算してゐた。續いて起る拍手のうちに、につこり笑つた、若い男が、輕快な動作で、卓の後ろへあらはれた。紅白の幕の前に立つた彼の白い皮膚と、角刈にした頭と、外つ齒の愛嬌ある口元とは、何よりも先づ藝人に接したと云ふ遊戯的な氣分を人々に與へたのであつた。最後の拍手や、野次馬の呼び聲などが鳴りやんでから、わづかの間の沈默が、秒と秒との間にダッシュを引いた。

「――ええと、金門灣頭から降るアメリカを後にして、櫻花咲く日の本の橫濱埠頭まで、旅程十六晝夜、長の御旅のつれづれを私ども藝人風情が、御聽舊しの題を掲げまして、一夕の御淸聽を煩はすことは、甚だ恐れ入りました次第で御座りまするが。」

外國ではどんな場合にも聞かれない種類の、個人性を極端まで否定してかかつた敬語の連發と、慇懃伏したやうな彼の動作は、聽衆を、一段高まつた、藝人を愛顧してやつてゐると云ふ見物人の心理狀態に置いた。

「……この御仁、十を知つて百を悟り、目から鼻へ拔けるやうな恐ろしい智慧で、――幸ひ智慧であつて結構、これが梅毒ででもあつて御覽じろ……」

一同は顎を外して笑つた。氣のゆるみに乘じて、合の手を籠めた三味線は、冴えた撥音に、現實の固有名詞や代名詞を、遠い昔の空想の距離に押し隔てた。鼻にかかつた低音が、言葉を操り、せりあげて、だんだん口腔いつぱいの濁つた强音に變ると、人々の腦裡に刻まれる一句一句は、封建時代の社會觀や、日本でなけりやわからぬやうな不自然な思想や、それに絡みついて醜惡なものを美化しようとする雲とか花とか云ふ自然の現象や、卑俗な英雄崇拜の觀念などであつた。聲の抑揚が騷々しい言葉を運んで、ぐんぐん音階を登りつめると、末はやはらかな妙音になり、語手は自分の聲に魅されたやうに、眼を閉ぢてびしやり卓を扇で叩いて、苦痛に堪へぬやうな長音を引いて、沈默が呑むままに聲を納めた。と思ふと、くだけた、平板な敍述が浪花節特有の誇張した談話體で、いろいろな事件を、さもさも面白さうに、疑惑を挿まぬ頭で考へられて來た通り、するすると物語られて行くのであつた。……朱鞘の刀をさした偉丈夫とか、月代の靑い町人の群とか、忠僕の奴隷的奉仕とか、あらゆる人權を放棄してまでも男性の橫暴を助長した婦人の風習とか、さう云つた事

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com